

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第56巻第2号 2020年12月

Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY

Vol.56 No.2 December 2020

《論 説》

## あるアメリカ人戦争捕虜の体験した ドレスデン空襲

香 月 恵 里

Was sah ein amerikanischer Kriegsgefangener in Dresden?

KATSUKI Eri

### はじめに

ドイツにおける、いわゆる「空襲と文学」論争が問うたこととは、第二次世界大戦においてドイツの民間人が体験した空爆の過酷な経験は集合的記憶として国民の間に保持されるべき重大事件であったはずなのに、どうしてこれを題材にした文学が少ないのかという疑問であった。その答えの一つは、ホロコーストという未曾有の犯罪の責任を負うドイツ人には自国の被害について語ることは許されず、声を上げることは憚られた、というものである。しかし、数少ないとはいえ、そうした体験を描いた文学は存在する。前稿では、その一つとしてディーター・フォルテによる自伝的小説『血だらけの靴を履いた少年』を取り上げた。1935年生まれのフォルテは故郷のデュッセルドルフで昼夜を分かたぬ爆撃に晒され、その後はドイツ中を避難民として流浪し、大人にも耐えられないような辛酸を舐めた。

終戦当時10歳にもなっていなかったフォルテはナチ国家の犯罪とは無関係であり、それゆえ、民間人を襲った爆撃の不条理について語る事ができるはずの人間の一人であった。それでも彼は、90年代になるまで自分の戦争体験を文学にすることはできなかった。

今回取り上げるアメリカ人作家カート・ヴォネガット（1922-2007）<sup>1</sup>は、米陸軍の二等兵として1944年冬のヨーロッパ戦線に投入され、ドイツ軍の捕虜となり、その後移送された先のドレスデンで大空襲に遭遇した。この体験をもとにして書かれた、SFの手法を取り入れた半自伝的長編『スローターハウス5』（1969年）は、ドレスデン空襲を扱った文学作品の中で最も多くの読者を獲得したものである。この作品によって、それまでアメリカであまり知られていなかったドレスデン空襲という事件が一般的にも認識され、その人道上の問題についての論争が行われることにもなった。

ドイツにおける空襲の恐怖を経験し、被害を受けたのはドイツ人だけではない。迫害されていたユダヤ人、ドイツで強制労働に従事させられていた外国人や連合軍の捕虜、動物たちの上にも区別なく爆弾は投下された。罪なき子供であったフォルテのような人々と同じく、彼らもまた罪の意識を持つことなく空襲の真実を語る資格を持つはずの存在であった。

本論では、ヴォネガットがアメリカに復員した後、戦地での体験を文学作品へと言語化するまでの長い過程を検証し、どうして彼が『スローターハウス5』を書かなくてはならなかったのかを考えてみたい。

## 1 ドレスデン空襲とその意味づけ<sup>2</sup>

ドイツ東部に位置するドレスデンはかつて、バロック様式の建造物が並び、「エルベ河畔のフィレンツェ」と称えられる、中世以来の歴史を誇る美しい都市であった。軍事的な標的がなかったため、戦時中も高射砲が配

- 1 『スラップスティック』（1977年）以前の作品はカート・ヴォネガット・ジュニアの名前で出版されている。
- 2 以下、ドレスデン大空襲についての記述は主に、Jörg Friedrich: *Der Brand. Deutschland im Bombenkrieg 1940-45*. Propyläen Verlag, 2002, S. 358ff. を参考している。

置されておらず、非武装都市であったこの町は、1945年2月13日から14日にかけて、英米連合軍による絨毯爆撃で灰塵と帰し、市街地の約90%が破壊された。

空襲の第1波は、2月13日22時3分から28分までで、この短時間に877トンの爆弾が投下された。死者数が増えたのは、最初に高性能爆弾を落として建物を破壊し、その後焼夷弾を大量に投下して無数の火災を起こし、それが結びついた火災嵐を人為的に作る作戦がこの地でも成功したこと、また、最初の空襲からしばらく経って人々が出てきたところを再び攻撃するという「2波攻撃」によるところが大きい。14日1時23分から始まった第2波では、約30分の間に第1波を上回る爆弾が落とされた。

当時、この町には64万のドレスデン市民に加え、ソ連の進攻に伴って西に逃げてきた東部地域からの難民が多数流入しており、1945年2月には80万から100万の人々で町は膨れ上がっていた。死者の数は2万5千から13万まで諸説あり、ドレスデン市の調査委員会は現在、2万5千人との公式見解を発表しているが、ヴォネガットは晩年まで一貫して13万5千という数字にこだわっている<sup>3</sup>。爆撃直後にナチが発表した死者数20万以上というのは明らかな反英米のプロパガンダであるが、真実がどこにあるのかは、決して明らかになることはないであろう。

ドレスデンにおける死亡率は、実は飛び抜けて多いというわけではない。1943年7月の、ハンブルクを標的にした「ゴモラ作戦」は4万人以上の死者を出しており、1945年2月のプフォルツハイム空襲では、市民の3人に1人が死亡している。しかし、前述のようにドレスデンが芸術的なまでに美しい無防備都市であったこと、すでにドイツの敗色が濃くなっていた時期の大規模空爆であったことが、この爆撃に他の町の被害とは異なる意味合いを与えることになった。ドレスデン破壊の呵責のなさはチャーチルを

---

3 ヴォネガットが挙げるこの数字は、イギリスの歴史家デヴィッド・アーヴィングのベストセラー *The Destruction of Dresden* (1963) によるもので、アーヴィングの主張は現在否定されている。

も震撼させ、彼はこれ以降、自国の戦略爆撃の意味についてようやく疑問を持つようになった<sup>4</sup>。ドレスデンは不当に過剰爆撃されたのではないかとの議論がイギリスで起こり、その結果、戦後も長い間、ドレスデン爆撃の詳細に触れることは旧連合国の間でタブーとなった。

この爆撃には、戦後に備え、ソ連に対して英空軍の能力を見せつけておくという目的もあったといわれている。それは日本に対する原爆投下の目的とも通じるものがあり、それも理由の一つとなりドレスデンは「ドイツのヒロシマ」と呼ばれ、ドイツにおける第二次世界大戦の被害を象徴する町となった。ドレスデンの壊滅は広島、長崎に対する原爆投下同様、軍事的意味を欠いた純然たる民間人虐殺であり、戦争犯罪である、というのは、ドイツの右派が強く主張するところで、毎年2月13日と8月6日には各地からネオナチや極右の団体がドレスデンに集まってデモを繰り広げる光景がみられる。このように、旧連合国においては、民間人虐殺という非難に対するうしろめたさが、ドイツにあっては政治的配慮が、ドレスデン空襲に対する態度表明を難しいものになっている。その上、ドレスデンを州都とするザクセン州は1949年以降東ドイツとなったため、兄弟国ソ連に対する遠慮があり、人々は戦後も長い間、この空襲については沈黙してきた<sup>5</sup>。

## 2 ヴォネガットのドレスデン体験

1943年夏のハンブルク大空襲を題材にしたルポルタージュ的作品である、ハンス・エーリヒ・ノサックの「滅亡」には、作者が空襲後のハンブルク市内に戻ったときに偶然目にした、犠牲者の遺体回収の光景を記した部分がある。

4 Friedrich, S. 168f. 参照。

5 ヴォネガットは1967年にドレスデンを再訪し、当時の監視兵や将校たちに電話をかけて話を聞こうとするが、彼らは秘密警察に怯えているのか警戒して、当時のことは何も憶えていないと主張する。Charles Shields: *And So It Goes. Kurt Vonnegut. A Life.* New York: Holt, 2011, p. 228. / 邦訳: 金原瑞人・桑原洋子・野沢佳織 訳『人生なんて、そんなものさーカート・ヴォネガットの生涯』柏書房、2013年参照。以降、本書からの引用は邦訳に従う。

完全に閉鎖された市街には高い障壁が設けられ、入り口には歩哨が立っている。

「また何をする気なんだろう」と歩哨の一人が言った。「楽な仕事じゃない」。縞の服を着た囚人たちが中で働いているのが見えた。彼らは死者を回収させられていた。遺体、あるいはかつて人間だったものの残骸とでもいうべきものは、その場で燃やすか、地下室で火炎放射器を使って焼却するのだという話だった。だが、実際はもっとひどかった。囚人たちは蠅のために地下室に辿り着くことができず、指ほどのウジのため床ですべり、炎によって殺された人々のところに辿り着くためには炎で道を開くしかなかった<sup>6</sup>。

郊外で休暇を過ごしていて空襲を免れたノサック夫妻は、財産を失った被災者ではあるものの、この場では、破壊された町と死者を外側から眺める傍観者である。空襲の後には、消火活動、瓦礫の片付け、そして、もっとも辛い遺体回収の作業があった。成人のドイツ人男性の多くは前線にいたため、空襲の犠牲となったのは女性、子供、老人が多かった。また、空襲の後、時には素手で瓦礫の除去にあたり、復興の第一歩を始めたのは、「瓦礫女」Trümmerfrauenと呼ばれる女性たちであった。そして、遺体回収という、最も辛く危険を伴う労働を強いられたのは、多くの場合、ノサックが報告するように、強制収容所の囚人や戦争捕虜であった。

こうした人々は、感謝されることもなく、それどころかしばしばドイツ人から暴力を加えられながら、神経を苛む労働を強いられた。彼らは瓦礫女のように戦後、銅像となって顕彰されるわけでもなければ、大統領の演説で称えられるわけでもなかった。しかし、彼らもまたドイツの民間人同様に空襲の犠牲者であり、たとえ命が助かってその後に過酷な体験を強

6 H. E. Nossack: Der Untergang. In: *Interview mit dem Tode*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1980, S. 238.

いられ、戦後に無事解放されたとしても、長く消えない深い傷を負ったのに違いない。こうした人々はいかにして辛い過去の経験と折り合いをつけて生き続けたのであろうか。彼らの体験を描いた文学はほとんど存在しない。

ヴォネガットは、1944年冬、西ヨーロッパ戦線に派遣され、ドイツ軍の最後の攻勢であり、米軍の大失策であるバルジの戦いに巻き込まれた。12月19日、部隊は壊滅し、捕虜となったヴォネガットたちは食料も水も睡眠もなしで雪道をアイフェル地方のゲロールシュタインまで100キロ近くも歩かされ、その後家畜運搬用貨車に詰め込まれて移送された。途中、この捕虜輸送用貨車は英軍によって爆撃され、150人が死亡している。移送先は東部ドイツのザクセン州ミュールベルクにある大規模捕虜収容所スターラクⅣ-Bであった。やがてそこが手狭になると、彼らは1945年1月12日、ドレスデンに送られ、第5食肉処理場（スローターハウス5）に収容され、一日に黒パン250グラムと調味料なしのジャガイモスープ約半リットルだけの食事で強制労働を強いられた<sup>7</sup>。

ドレスデン大空襲はそれから約一月後のことである。捕虜たちは食肉処理場の深い地下に潜っていたため無事であった。爆撃が終わり、彼らが外へ出ると、ドレスデンは火災嵐によって「月面」のような荒野と化していた。

ドレスデンには、ベルリンに建設されたような大規模な防空用ブunkerはなかったので、市民たちは地下室に避難していた。火災嵐によって地下室の壁は高温のかまどと化し、中の人々は窒息するか熱で死亡した。大量の死者を処理するため、旧市場に鉄製の巨大な火格子が作られ、遺体はその上で火葬された。この光景について、あるドイツ人は次のように書き残している。

---

7 Shields, pp. 59-61およびKurt Vonnegut: Letter from PFC Kurt Vonnegut, Jr., to his family, May 29, 1945. In: *Armageddon in Retrospect*. New York: Patnum, 2008, pp. 11-13. / 邦訳: 朝倉久志 訳「カート・ヴォネガット上等兵が家族に宛てた手紙」、『追憶のハルマゲドン』所収、早川書房、2008年参照。以降、本書からの引用は邦訳に従う。

遺体を火葬にしてもよいという許可を与える他、選択の余地はなかった。火葬は旧市場で行われることになった。そこには鉄製梁で巨大な火格子が建てられ、その上に一回につき約500人の遺体が薪の上に並べられ、ガソリンをかけられ、燃やされた。ドレスデンの旧市場に置かれたこの火葬用薪は今世紀の歴史の汚点であり、他に類例を探すのは困難である。これを見た者はその恐ろしい光景を生涯忘れることはないだろう<sup>8</sup>。

ドレスデンの中心地で5週間燃え続けたこの火格子は、SSのシュトライベル部隊が作り上げたもので、彼らはこの方法を東部トブレリンカの絶滅収容所で学んでいたのである。「帝国の敵」やユダヤ人に対して行われた、恐怖を呼び起こすこの処理方法が、今はドイツの地で、ドイツ人の死者を対象に実施されたことになる。その意味でドレスデンの民間人殺戮は、犠牲者たちの同胞男性が絶滅収容所で行った殺人の、もっともな報復であるとも解釈でき、その意味でも「今世紀の歴史の汚点」なのである。しかしその後、数日経つとこの方法での処理も追いつかなくなり、死体運搬作業は中止され、地下室に降りた兵士が火炎放射器を使ってその場で死者を火葬にすることになった。

こうした作業に従事させられたのが戦争捕虜であった。彼らは地下室の死体を外に運び出し、ドイツ人の罵声を浴びながら荷車に積み、石を投げつけられながら市内の空地に運んだ。また、市内に悪臭が漂い始めると、防空壕に入って、遺体から貴重品を抜き取ってドイツ兵に渡し、火炎放射器を持ったドイツ兵が死者を焼き払うのを見た<sup>9</sup>。

また、自国の軍隊が民間人虐殺に加担していたことは、正義の戦争に従軍していたつもりのヴォネガットを深く落胆させた。英空軍が軍事目標に

8 Friedrich, S. 431.

9 Kurt Vonnegut: Self-Interview. In: *Palm Sunday*. New York: Delacorte, 1981, pp. 90-91. / 邦訳：飛田茂雄 訳『パームサンデー—自伝的コラージュ』早川書房、2009年参照。以降、本書からの引用は邦訳に従う。



狙いを定めた精密爆撃を比較的早く諦め、敵の士気を挫くための絨毯爆撃に方向転換していたのに対し、米軍は戦争末期まで名目上は民間人保護にこだわり、低高度を飛ぶ爆撃機によって軍事目標のみを爆撃していることになっていたからである。晩年のヴォネガットは自国の政権に対し激しい憎悪の言葉を書き連ねるようになるが、政府に対する不信感第二次世界大戦中の体験に遡るものと思われる。

### 3 ヴォネガットの戦後

第二次大戦から帰還したのち、作家となるべく執筆活動を始めていたヴォネガットにとって、ドレスデン体験について書くことは全く簡単なことのように思えた。「見てきたことを紙に書き移せば、それでよい」<sup>10</sup>はざだった。しかし実際には『スローターハウス5』が出版されるまで、実に4半世紀にも近い年月がかかっている。そのあたりの事情は、作品の第1章でも説明されているし、作家が様々なインタビューでも語っている通りである。

まず、ドレスデン空襲の詳細については、当時のアメリカではほとんど何も知られてはいなかった。爆撃についての資料を米軍が公開したのは1978年のことである。また、アメリカではナチとの戦いは正義の戦争とされていたため、ドイツ爆撃も、ナチの極悪非道に対する、ほんのささやかな制裁であると考えられていた。『スローターハウス5』の第1章で「わたし」がカクテル・パーティーで出会った大学教授に向かってドレスデン空襲について話すと、教授は強制収容所やナチの残虐行為について滔々と語り出す。それに対し「わたし」が言えるのは、「それはわかってます」（強調は原文、13）ということだけである。さらに、ヴォネガットはその名前が示すとおり、ドイツからやってきた移民の4代目であり、ドイツ系の人

---

10 Kurt Vonnegut: *Slaughterhouse-Five*, New York: A Dial Press Trade Paperback, 2009, p. 5. / 邦訳：伊藤典夫 訳『スローターハウス5』早川書房、2014年。以降、本書からの引用はカッコ内に原文のページ数のみを記す。引用は邦訳に従うが、訳語を変えた部分がある。



間がドレスデンの壊滅について非難めいたことを書くことを、他のアメリカ人が快く思わないであろうことは確実だった<sup>11</sup>。

ヴォネガットは、実は終戦直後から自分の戦争体験について記す試みを行っている。1945年から47年頃に執筆されたものと思われる「悲しみの叫びはすべての街路に」と題された短編には、遺体回収作業の様子が詳しく記録されている。

“救助”作業につくため、われわれは少人数の班に分けられ、それぞれの班に監視兵がついた。任務は死体捜索という不気味なものだった。そのあとの何日間か、大きな収穫がつづいた。最初ささやかな規模だった—ここに片脚、あそこに片腕、ときどきは赤ん坊—だが、正午前に主動脈が発見された。ある地下室の壁をぶち破ったとき、ごったまぜになって悪臭を放っている百人あまりの死体にでくわしたのだ。

中略

われわれは説明を受けた。おまえたちの仕事は、流血現場のなかを徒渉し、遺骸を運びだすことだ、と<sup>12</sup>。

これは先に引用した、ノサックが見たハンブルクでの遺体回収作業の描写を連想させる。違いは、ヴォネガットがその作業を実際に担わされた者の視点から、不気味なユーモアを交えて書いていることである。

ヴォネガットの作品の多くには、戦争の影が色濃く見られる。『ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを』（1965年）にはドイツでの戦争で神経を病んだ人物が登場する。主人公のローズウォーターは復員兵であり、戦争神経症でしばらく入院したあと、祖先から受け継いだ財産を慈善事業に費やすことに情熱を燃やしている。常道を逸した彼の隣人愛は、戦

11 Self-Interview, p. 91参照。

12 Kurt Vonnegut: *Wailing Shall Be in All Streets*. In: *Armageddon in Retrospect*, pp. 39-40. / 邦訳：朝倉久志訳「悲しみの叫びはすべての街路に」、『追憶のハルマゲドン』所収。

時中、南ドイツで兵士と間違えて14歳の消防士の少年を殺害したという罪責感によるものである。また、消防団の仕事に献身している彼は、インディアナポリス（ヴォネガットの故郷）全体が巨大な火災嵐に襲われるという幻覚に突如襲われる<sup>13</sup>。これは作者がかつて地下室から覗き見たドレスデンの業火の記憶であろう。1966年に、『母なる夜』（1961年）が再版された際には新たに序文を寄せ、ドイツ系である自分がナチのスパイを主人公にした小説を書いたことについての釈明の一環として、自分とドイツとの関係や、ドレスデンでの体験を記している<sup>14</sup>。

こうして少しずつドレスデン小説の核心に近づいていったヴォネガットであるが、執筆が難渋した一番の理由は、素材そのものが抱える困難であったと思われる。それは、他人の苦しみを題材とすることについてのためらいと、生き残った人間が持つ罪責感である。

『空襲と文学』でゼーバルトは、ハンブルクの本屋に、火災嵐後の街路に転がる死体の写真がポルノ写真でもあるかのように置かれていたという話を紹介している<sup>15</sup>。ヴォネガットの登場人物、ローズウォーターもまた、ドイツの火災学者ハンス・ルンプの著書で英米の戦略爆撃の非道さを告発する『ドイツ爆撃』（原典は*Das war der Bombenkrieg*, 1961年）を隠し読んでいるが、「その本に対する彼の感情は、意思の弱いピューリタンがポルノグラフィに似てそれに似て」<sup>16</sup>いる。ヴォネガット自身も「人の虐殺を描くなど、虐殺そのものよりひどいことのように思える」<sup>17</sup>と考えて悩んだ様子である。1998年に行われた、ドイツの文芸批評家フォルカー・ハーゲとのインタビューでも、「本当は見てはならないものを見る

13 Kurt Vonnegut: *God Bless You, Mr. Rosewater*. New York: Dell, 1970, p. 175. / 邦訳：朝倉久志 訳『ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを』、早川書房、昭和59年参照。以降、本書からの引用は邦訳に従う。

14 Kurt Vonnegut: *Mother Night*. New York: Laurel, 1966, pp. v-vii. / 邦訳：飛田茂雄 訳『母なる夜』、早川書房、2013年参照。

15 W. G. Sebald: *Lufkrieg und Literatur*, Frankfurt am Main: Fischer, 2002, S. 90参照。

16 *God Bless You, Mr. Rosewater*, p. 175.

17 Shields, p. 228.

のは、何かポルノに似たことだ—傷とか、死とか」<sup>18</sup>と語っている。他者の無残な死を描くことには、禁断の行為なのではないかという疑念がつきまとう。

それなのになぜ、ドレスデン体験を書かなくてはならないと思ったのか、その理由を彼が語ったことはないが、友人や出版人への手紙から、彼がドレスデンでの体験を書くことを自分の義務だと考えていたことは確かなようである<sup>19</sup>。

本格的にドレスデン物語に取り組むことを決めた契機の一つは、作家の言うところでは、1963年、イギリス人デヴィッド・アーヴィング著『ドレスデンの壊滅』*The Destruction of Dresden* がベストセラーとなったことである。ドレスデン爆撃について「ヨーロッパ史上最大の虐殺」と断定するこの本は、ヴォネガットが覚えていたであろう、自国の軍が行った行為を非難することに対する躊躇の幾分かをとりさってくれたはずである。もっとも、アーヴィングはヒトラーの命によるユダヤ人虐殺はなかった、と主張する歴史修正主義者であり、著書でもドレスデンの犠牲者数を改竄していたことがのちに判明している。

ヴォネガットを動かしたもう一つの出来事は、当然ながら、ベトナム戦争である<sup>20</sup>。もともとその意義が正当化しがたい戦争である上に、1968年3月には無抵抗の民間人504人が殺されたソンミ村虐殺事件が起き、これは彼の目に、かつて見たドレスデンの民間人虐殺の悪夢と重なって見えたに違いない。

しかし、ヴォネガットが、ドレスデンについて書くことを義務だと考えていた理由は、これだけではないだろうと思われる。

18 Volker Hage: *Zeugen der Zerstörung—Die Literaten und der Luftkrieg*, Frankfurt am Main: Fischer, 2003, S. 284.

19 Shields, pp. 228-229参照。

20 Kurt Vonnegut: *A Man Without a Country*. Ed. Daniel Simon. New York: Random House, 2007, p. 20. / 邦訳：金原瑞人 訳『国のない男』NHK出版、2007年参照。

## 4 ふたりのアメリカ兵

### 1) ビリー・ピルグリム

終戦直後に家族に宛てた手紙でヴォネガットは、飢死した若い兵士と、食べ物を盗んで射殺された兵士のことに触れている<sup>21</sup>。彼らの無残な死はヴォネガットの記憶に長く残ったと思われる。おそらく、この飢死した若者が『スローターハウス5』の主人公ビリー・ピルグリムの、そして食べ物を盗んだ兵士がエドガー・ダービーのモデルであると思われる。以下、このふたりの人物を、ヴォネガットが物語の中でどのように造形しているのか見てみたい。

『スローターハウス5』は10章から成っており、1章では作家である「わたし」がこの物語を書くことになった経緯について報告する。冒頭に「ここにあることは、まあ、大体そのとおり起こった」（1）とあるように、「わたし」が語る内容は大筋においてヴォネガットの体験とみなしてよいので、「わたし」はヴォネガット自身ではないとしても、作者自身を強く投影した人物だと考えられる。かつてドレスデンで体験したことをなんとか思い出すため戦友バーナード・オヘアを訪問したこと、そして彼と東ドイツを訪問したことなど、この物語の成立過程を「わたし」は冒頭の章で語る。

2章から9章までの中で、「わたし」が作り出した主人公ビリー・ピルグリムは、1944年の西部戦線、1945年2月のドレスデン、戦後のアメリカ、そして地球から遠く離れたトラルファマドール星の間を激しく時間旅行する。最終章で再び姿を現す「わたし」は、ケネディ暗殺2日後、つまり1963年11月24日のアメリカから、空襲後の遺体回収作業に駆り出されているビリーの様子を読者に報告する。ゆえにこの長編は一種の「枠物語」ともいえるが、ビリーの捕虜仲間の一人として「わたし」が途中で唐突に登場したりもする。

「わたし」には、深夜になると病的な衝動に駆られ「マスタートド・ガスとバラの匂い」（5）をさせながら、酔っ払って昔の知り合いに電話をか

21 Letter from PFC Kurt Vonnegut, Jr., to his family, May 29, 1945, p. 12参照。

ける癖がある。この「マスタード・ガスとバラの匂い」とは、廃墟のドレスデンに漂っていた、腐敗した死者たちの匂いであることが物語の最後近くになって判明する。(274)「わたし」は1960年代のアメリカに暮らしながら、今もドレスデンの死者たちに取り憑かれている。ドレスデンで見た死は常に「わたし」の眼前にあるのだ。

物語の主人公であるビリーは、全てにおいて不器用で兵士仲間から邪険にされている、道化師のような米軍従軍牧師助手である。奇跡的に身体は無傷のまま戦後に復員すると、検眼医学校校長で極右団体の会員でもある富豪の娘に、愛情もないのに求婚し、そのおかげで城のような豪邸に住み、アッパーミドルクラスの生活を営み、2人の子供をもうける。息子はハイスクール時代、手のつけられない不良であったが、今ではベトナムでグリーンベレー（米陸軍特殊部隊）の一員となり「立派に更正」している。ビリーやその義父が所属するライオンズクラブでは、北爆継続に執着し、ベトナムを石器時代にすることも辞さないと言い放つ少佐（カーチス・ルメイがモデルと思われる）がゲストとして講演している。かつて空襲で酷い目にあったはずのビリーであるが、彼には北爆に異を唱える気はない。(76)

こうしてみると、「どんな状況にあっても殺戮には加わらないように」、「殺戮機械を作るような会社には勤めるな」(24-25)と息子に言い聞かせている「わたし」とビリーはまったく対極の存在であるように思われる。しかし、ビリーもヴォネガットと同じく1922年生まれとされていることや、奇跡的に無傷で戦後のアメリカに復員し、また自分を崇拜する女性と結婚し、その職業において一応の成功を収めていることを考え合わせると、「わたし」同様に作家自身の分身でもある。ビリーとは、戦後しばしば抑鬱状態に陥り、ややもすれば無気力になりがちな作家自身のもう一つの姿ではないだろうか。

ビリーは復員後、精神を病んで入院するが、医者たちには病気が戦争体験というトラウマに帰因することが理解できず、あるいはそれを認めようとせず、幼児体験にのみ原因を求めている。すでにヴォネガットは1965年

発表の『ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを』のなかで、戦争神経症 combat fatigue という言葉を使っているが<sup>22</sup>、PTSDによる障害はアメリカでも1980年代まで精神医療の分野で公式には認識されていなかった。戦場体験を経た兵士が陥る深刻な心身の症状が一般に認識され、研究が進むのは、ベトナム戦争の帰還兵たちの中に、精神に異常をきたしたり、薬物を乱用したり、自殺したり、社会に適応できない者が多く出たあとのことである。第二次大戦終結から20年ほどしか経過していない60年代、男らしさと強さを美德とするアメリカ社会において、「正義の戦争」を戦ったはずの兵士たちが精神を病むという事実は、周囲にとっても本人たちにも認めがたいことだったと思われる。

ビリーの見せる無気力さ、外界への無関心が典型的なPTSDの症状として説明できること、日常の小さな事象がビリーにとって、戦時中の記憶を思い起こさせるトリガーとして働いていることについては、スーザン・ヴィーズ＝グラニーが精神医学の知見を交えて仔細に検討を加えている<sup>23</sup>。この作品を一見SF小説のように見せている「時間旅行」も、「[現在]に「過去」が侵入してきたことを指す」と解釈でき、「フラッシュバック」的な記憶の回帰とみなす以外にない<sup>24</sup>。ビリーの時間旅行とは、トリガーによって「わたし」を襲うドレスデン体験の想起という現象の言い換えなのである。

ビリーは外面的には何不自由ない生活をしているが、妻に対しても心を開くことはなく、2人の子供にも愛情を感じていない。戦後のビリーは「生きることの不熱心」(77)で、「べつにとりたてた理由もないのに、泣くことがおこなった」(78)。戦争のことで秘密はないのか、人に話したくないようなことはあるのか、と妻に聞かれると、「いや、ないね」と即答し

22 *God Bless You, Mr. Rosewater*, p. 16.

23 Susanne Veas-Gulani: Diagnosing Billy Pilgrim: A Psychiatric Approach to Kurt Vonnegut's *Slaughterhouse-Five*. In: *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, volume 44, 2003. pp. 175-184参照。

24 諏訪部浩一『カート・ヴォネガットトラウマの詩学』三修社、2019年、130-131頁。

て逃げる。(154-157) 戦争について話すことを好まないビリーであるが、実際には、日常の平凡な出来事が引き金となって、戦争中の体験を否応なく想起してしまう<sup>25</sup>。

しかし彼は、自分が、戦時中に見たもののせいで「生きる意味を失っている」(128) ことを自覚しないままである。ドレスデン体験が自分の人生の意味を疑わしくさせている核心的な出来事であったことを、ビリーが初めて認識するのは、18回目の結婚記念日のパーティーの席でのことである。

男性カルテットが「ああ、昔の仲間に見えるなら」That Old Gang of Mineと題された戦前のヒットソングを歌い出すや、その歌詞を聞いたビリーは激しい感動に捉えられ、次には心臓発作にでもあったように打ちひしがれてしまう。(220-221) この時になって彼はようやく、自分の中に「とほまもなく大きな秘密が隠されている」(221) ことを知るが、それが何なのかはまだ理解できないままである。カルテットがもう一度歌い出した時、彼の感情は再度ずたずたに苦しめられるが、今度彼の心をひどく乱したのはその歌詞ではなく、4人組の男という存在である。

ビリーはパーティー会場を去り、ひとりになってじつくりと記憶を辿る努力を初めて行う。そして遂に、男性カルテットが彼に想起させたものとは、廃墟のドレスデンにいた4人のドイツ人警備兵の姿であることに思い至る。ビリーの回想の中で、驚きと悲しみに打ちひしがれた警備兵たちの様子はまるで歌でも歌っているかのように見える。その歌が、「ああ、昔の仲間に見えるなら」であった。以下の引用はビリーの回想である。

警備兵たちは本能的に体をよせあい、きょろきょろと見まわした。

中略

「さようなら永遠に」彼らはさううたっていたのかもしれない、「昔の仲間よ友達よ、さようなら永遠に、昔の恋人よ、友達よ—みんなに神の祝

25 一例を挙げれば、ポーランド人を題材にした戯れ歌を聞いて、ドイツ人女性と性交したために絞首刑にされたポーランド人をドレスデンで見たことを想起する。(198)



福を—” “old fellows and pals; So long forever, old sweethearts and pals—God bless’ em—” (227)

ビリーが意識していなかった「とほうもなく大きな秘密」とは、ドレスデンの廃墟で見た地獄のような光景だった。

地球から遥か遠くに離れたトラルファマドール星で、同じく地球から誘拐されてきたポルノ女優のモンタナに向かって、ビリーはドレスデンでの体験を語り出す。トラウマ的な出来事をまず認識し、それを物語るのが治療のために大いに役立つことは、近年の研究の教えるところである。ビリーはこうして、トラウマを自覚し自己を取り戻す過程を始めるのである。

伝記作家シールズの書によれば、ビリーのモデルとなったのは、ヴォネガットと同じく捕虜となった米兵、聖職者志望のジョー、ことエドワード・クローンである<sup>26</sup>。運動神経が鈍く、内気で、現実離れしていて、兵士らしいところなどかけらもなく、戦争を理解できなかったこの青年は、自分の食物をタバコと交換してばかりいたため、仲間の絶好のカモとなって衰弱し、終戦の直前、ゲルリッツの市民病院で死亡した。ドイツ兵に軍服を取り上げられ、代わりに紙製のスーツを着せられて埋葬されたジョーは「カートの目に「美しかった」」。ヴォネガットはそこに「一種の聖なる愚者」 a kind of holy foolを見出したのだ、とシールズは書いている<sup>27</sup>。

ヴォネガットはかつて、戦友オヘアの妻メアリー・オヘアから、戦争を賛美するような作品を書くつもりなんだろう、と非難され、「フランク・シナトラやジョン・ウェインが出てくる小説にはしない」と誓った<sup>28</sup>。英雄とは程遠いビリーを主人公にすることで、ヴォネガットはメアリーとの約束を守ったことになる。アンチ・ヒーローであるビリーは「わたし」によって最後にクリスマス・キャロルに歌われるキリストの姿に例えられて

26 Shields, p. 66.

27 Shields, pp. 76-77参照。

28 Self-Interview, pp. 92-93. また、*Slaughterhouse-Five*, pp.18-19参照。

いる。(252)

## 2) エドガー・ダービー

物語に登場するもう一人の重要人物は、廃墟のドレスデンでティーポットを見つけたばかりに、ドイツ兵から銃殺される中年のハイスクール教師エドガー・ダービーである。第1章で「わたし」は旧友オヘアに、計画中のドレスデン物語の計画について語り、そのクライマックスにエドガー・ダービーの処刑の場面を持ってくるのはどうだろうか、と相談する。何千何万という人びとが死んだ後の焼け野原で、生き残ったひとりの米兵がティーポットを盗んだかどで逮捕され、銃殺刑になる、という事件の「アイロニーが強烈だから」(6)という理由である。

シールズによれば、エドガー・ダービーのモデルとなったのは、マイケル・パレイアという年配の捕虜である。彼は空襲後の3月31日、地下室での作業中、飢えを我慢できず、コートの中にこっそりサヤインゲンの瓶を隠し持っていたところを親衛隊に見つかり、軍法会議にかけられ、読めないドイツ語の書類にサインして窃盗を認めてしまった。翌日4月1日、彼は他の捕虜へのみせしめのため銃殺刑に処せられた。ヴォネガットは他の3人の捕虜とともにパレイアの墓穴を掘らされ、遺体を埋葬した<sup>29</sup>。

大空襲を生き延び、もうすぐ終戦という時期に、サヤインゲンの瓶のために殺された捕虜仲間のエピソードを物語のクライマックスにする、という「わたし」のアイディアはなんと冷笑的でエゴイスティックに思える。しかし、シールズが参照した家族蔵の手紙によれば、ある時、ヴォネガットはパレイアへの処刑があまりに無情に行われたことを家族に話しながら涙をおさえられなくなり、ドイツ兵を激しく罵ったという<sup>30</sup>。

一方、『スローターハウス5』のエドガー・ダービーには、飢えを我慢できず食べ物をくすねる情けない男という要素は全く見られない。彼はア

29 Shields, pp. 75-76参照。

30 Shields, p. 76参照。

アメリカ人捕虜集団のリーダーにふさわしい包容力と知識を備えた人物として振る舞い、アメリカにいる妻に手紙を書くのを楽しみにする優しい夫でもある。そのみならず、「大部分の人が病んでおり、また得体の知れぬ巨大な力に翻弄される無気力な人形にすぎない」登場人物の中でほとんど唯一、人間としての性格を失わない人物とされている。(208-209)

デービーが地下室からティーポットをもちだしたところを窃盗の容疑で捕らえられ、銃殺されるというエピソードはクライマックスではなく、この小説の終盤近くに4行で描写されており(274)、そのあまりのあっけなさは彼の死の不条理さをかえって際立たせている。ヴォネガットは1981年に発表した自伝的作品集のタイトルを、パレイアが処刑された日を指す「パームサンデー」と名付けている<sup>31</sup>。この祝日に起きた出来事はヴォネガットを捉えて離さなかったものと思われる。哀れな中年兵の死は、ヴォネガットによってキリストの受難にも似たものへと造形されているのである。

## 5 生き残った者の抱く罪責感

1973年に行われたインタビューでヴォネガットは、ドレスデン体験が彼に与えた影響については、『スローターハウス5』の成功によってかなり誇張した形で伝えられており、「ああいう短期間のできごとによって人生が変化するとは思いません」、「ゾツとする体験が必ずその人間を変えとはかぎらない」<sup>32</sup>と述べている。戦争から帰還した後のヴォネガットの人生はトラブルの連続であり、その苦労はたしかに戦争末期の数ヶ月の悪夢

31 ヴォネガットは、1984年に来日した際、大江健三郎との対談において、このエッセイ集を『パームサンデー』と題した理由を聞かれ、「私がああ題名をえらんだのはもっと簡単に素朴な理由があるんです。でもきっと何か心理的な、神秘的な理由があったのだとおもいます」と答えている。カート・ヴォネガット・大江健三郎「対談 テクノロジー文明と「無垢」の精神」、巽孝之監修『現代作家ガイド6 カート・ヴォネガット』所収、78-79頁。

32 Playboy Interview, In: Kurt Vonnegut Jr: *Wampeters Foma&Granfalloon (Opinions)*, Delacorte Press/Seymour Lawrence, 1974, p. 263. /邦訳：飛田茂雄 訳『ヴォネガット、大いに語る』早川書房、1988年。以降、本書からの引用は邦訳に従う。

を忘れさせるほどのものだったのかもしれない。しかし、戦争のトラウマと、生き残った人間を捉えて放さない罪責感、高齢になるまでヴォネガットに取り憑いていたことはまちがいない。

ドレスデン物語によって一躍流行作家となったヴォネガットは、この本が作者にとっていかなる意味を持っているのかと問われるたびに、自分は『スローターハウス5』によって経済的恩恵を受けた唯一の人間であると自虐的に語っている。1977年に発表されたインタビューでは「死者ひとりにつき3ドルずつ手に入れた」<sup>33</sup>、1998年には「13万5千人の死者だとすると、一人当たり5から10ドルを稼いだわけだ」<sup>34</sup>と言っている。これはヴォネガット流の諧謔精神の現れでもあろうが、甚大な死者を出した事件の場にながら、なぜ自分が生き残ったのか、そして、他の人間はなぜ死んだのか、という問いにまつわる苦しみをこのように、冒瀆的とも思える軽い調子で表現したのではないだろうか。それは一般にサバイバーズ・ギルトとして近年一般に知られるようになった、「生き残った者の抱く罪責感」であろう。『スローターハウス5』のビリーはアメリカ独立から200年目の1976年、ドレスデン空襲の記念日2月13日に殺されることになっている。作家自身は1984年に、アルコールと睡眠薬の過剰摂取による自殺未遂を図ったが、その日付は2月13日だといわれている<sup>35</sup>。『スローターハウス5』を書いたことで一応の区切りをつけたつもりであったヴォネガットではあるが、ドレスデンの記憶から完全に解放されることはなかったと思われる。

ビリーは、飛行機の墜落事故に遭って、ただ一人生き残る。時間旅行者である彼は、自分の乗っている飛行機が墜落すること、他の仕事仲間が全員死亡することを知っている。ヴォネガットがビリーに与える奇跡的な生存者という役割は、ビリーがヴォネガットのもう一つの姿であることを改

33 Self-Interview, p. 93.

34 Hage, S. 284-285.

35 諏訪部浩一、21頁、343頁参照。シールズによれば3月の事件とされている。Shields, p. 361参照。

めて認識させてくれる。

病院に運び込まれたビリーの隣のベッドにいるのは、ハーバード大学の歴史学教授で、第二次大戦における陸軍航空部隊戦史の要約に取り掛かっている軍事史家ラムフォードである。彼の病室には、アーヴィング著『ドレスデンの壊滅』が置いてあり、その本には、ラムフォードの友人たち、すなわち米軍退役中将アイラ・エイカーと、英空軍中将ロバート・ソンドビーによる2つの序文が付されている。ラムフォードはヴォネガット作品のいくつかに登場する架空の人物であるが、『ドレスデンの壊滅』は既述したように、1960年代にベストセラーとなったものの、その内容に捏造があることが判明している実在の問題作である。アイラ・エイカーは第二次世界大戦中、米陸軍航空隊の総司令官としてイギリスでドイツ空襲を指揮した軍人、ロバート・ソンドビーは英爆撃機軍団副司令官を務めた軍人で、両者とも事実、アーヴィングの本に序文を寄せている。エイカーの序文は、ナチズムの犯罪を告発し連合軍の死者を悼む方が大切だ、という内容であり、ソンドビーのものは、通常兵器でも核兵器並みの被害をもたらすことができることをドレスデンを例にとりながら説明し、核廃絶運動の意義を否定する内容である。(238-240)ドレスデン空襲についてラムフォードが妻リリーと話しているのを聞いた時、ビリーは初めて「理性的な言葉」を口にする。「わたしはそこにいた」I was there (245) というのがそれである。

ヴォネガットは、ドレスデンのことを書くに際し、様々な批判めいた言葉をかけられた。また、自分の属する軍隊が行った大量殺人について書くことには煩悶がつきまともったと思われる。しかし、問題はドレスデン爆撃が正しかったのか否かを問うことではない。奇跡的に生き残った自分が書くべきこととは、ドレスデンがたしかに壊滅されたこと、そして自分がそこにいたことである。それを悟ったとき、彼はライフワークを完成させることができたのである。

## さいごに

空飛ぶ円盤に誘拐された時、ビリーはトラルファマドール星人に向かって問う。「なぜ、わたしが？」その答は次のようなものである。

「それはきわめて地球人的な質問だね。ピルグリムくん。なぜ、きみが？ それをいうなら。なぜわれわれが？ なぜあらゆるものが？ そのわけは、この瞬間がたんにあるからだ。きみは琥珀のなかに捕らえられた虫を見たことがあるかね？」

中略

「われわれにしたって同じことさ、ピルグリムくん、この瞬間という琥珀に閉じこめられている。なぜというものはないのだ」（強調は原文、97）

なぜ自分は無傷で帰国できたのか。それは戦後も長くヴォネガットを苦しめた疑問だったに違いない。1万9千人の米兵が死亡したバルジの戦いを生き延びたものの、徒歩による真冬の行軍、過酷な移送、乏しい食事、さらには自国の軍やロシア軍、英軍による機銃掃射と、半年の間に何度も死の恐怖に直面した。終戦によって解放された時、彼の体重は20キロも減っていたという<sup>36</sup>。捕虜仲間の多くは凍死、餓死し、あるいは赤痢、移送途中の爆撃で死亡した。ヴォネガットが無傷で復員できたのは、奇跡にも近い偶然であった。そしてそのクライマックスがドレスデンでの体験である。

…その死刑は、たまたまその無防備都市にいた者すべてに例外なく科された。赤ん坊、年寄り、動物園の鳥やけもの、もちろん何千何万の気違いナチども、そして、親友バーナード・オヘアとほくもまじっていた。オヘアとほくは、どう考えても死者の数に入って当然だった<sup>37</sup>。

36 Playboy Interview, p. 263参照。

37 Self-Interview, p. 94.

『スローターハウス5』は、ヒロイズムとは無縁の戦争の真実を明らかにする。絨毯爆撃とは、たまたまその時、一定の空間の中に存在した有機体を、それがどこの国の人間であろうと、動物であろうと植物であろうと全てを抹殺する実験であった。そしてその実験の後に残った瓦礫を片付け、遺体回収という過酷な労働を強いられた人々に、様々な理由でそれを表現できないという苦しみを与えたのである。

1994年、ニューヨークを訪れたヴォネガットは、ビリー・ピルグリムのモデルであるジョー、すなわちエドワード・クローン<sup>38</sup>の墓に案内される。クローンの両親は戦後、5年を費やして息子の行方を探し、彼がドレスデン郊外の病院で死亡し、ゲルリッツで埋葬されたことを突き止めていた。そして東ドイツに行って息子の亡骸を連れ帰り、改葬していたのだった。ヴォネガットはそこへ案内してくれた人に、しばらく一人にしてほしいと頼むと、墓石に向かって話しかけ、涙を流し、その後「これで、ぼくのなかで第二次世界大戦の本は終わった」と語ったという<sup>38</sup>。

『スローターハウス5』は、ドレスデン爆撃に関する論争への、ヴォネガットなりの答えであり、ドレスデン爆撃という場になぜ自分がいあわせ、そしてなぜ自分が助かったのかという問いに対して彼が見出した答えである。そしてなにより、ドイツの地で理不尽に命を奪われた「昔の仲間と友達」への鎮魂の文学なのである。

---

38 Shields, pp. 393-394参照。